

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「JR 東海 農業参入」
- 2) 「飲むチーズ」
- 3) 「豪華な干支ボトル」
- 4) 「食のみやこ 鳥取プラザ」

1) 「JR 東海 農業参入」

JR 東海は 15 日、農業分野に参入すると発表した。子会社のジェイアール東海商事が実際に農業を手掛ける。

現在、愛知県南部の常滑市で耕作放棄地の選定を進めており、自治体から借り受ける形で農地を取得する見通し。レタスやホウレンソウ、水菜などの葉物類を中心に、ジェイアール東海商事の社員らが農作業にあたる。栽培した野菜は当面はグループ内で使用するが、将来は外販も検討する。

依然、農産物をはじめ食品に対する不安は大きい。産地偽装や薬物混入などの事件が起こったときに、多くの販売者は「信用していた」「防ぎようがない」といったコメントを出す。自らが目の届く農業を行えば、少なくとも第一段階の危険を防ぐことができるのではないかと。何かを始めるには障害がつきものだが、国内生産量増加・雇用口拡大のためにも小売業が率先してどんどん農業に参入して欲しいと思う。

2) 「飲むチーズ」

牛乳や飲むヨーグルトは既に一般的だが、「飲むチーズ」という商品がある。

チーズは日本で見るとは大抵固形で、液状のチーズを飲む、という感覚は今まで無かったが、有限会社牧家が昨年 4 月から販売しており、日本で恐らく初の、飲むタイプの本格的なナチュラルチーズだ。近年のチーズケーキブーム火付け役である「フロマージュブラン」の原型である。世界にはいろいろな種類のナチュラルチーズがあるが、日本ではそれほど普及していないチーズの種類をもっと知ってもらうため、手軽に飲めるタイプとして発案したものだそう。

“クリーミーなプレーン”と“スウィーティーなゆず”の 2 種類があり、いずれもナチュラルチーズ。味は、ヨーグルトよりも酸味が少ないし、飲みやすい。コクがあるので、一本飲むとかなりおなかが満たされる。

今までにあった一般的な食品が、食べる方法や形状が違っただけでこれほど新鮮である。手軽さが加われば親しみも増す。こういった商品が他にも出てほしい。

3) 「豪華な干支ボトル」

サントリーは17日、大阪の蒸溜所で、2009年の干支「丑」をかたどった陶器製ボトルにウイスキーを詰める作業を公開した。

干支ボトルの発売は今回で27回目で、11月4日に店頭に並ぶ。ボトルは「ローヤルプレミアム15年」用に赤地に金色を配した勇ましい牛の形のものと、「ローヤル」用に背中に赤い梅をあしらった白地の愛らしい牛の2種類を準備した。

09年は戦後最多の約230万人が還暦を迎えるため、例年還暦祝いの贈答用に人気の赤ボトルの売れ行きに期待がかかる。米国初の金融不安で消費は冷え込み気味だが、牛は財運向上のシンボルとされる。

人生の節目のお祝いにも、景気付けにも、真っ赤なデザインのこのめでたいボトルは、一年の始まりにぴったりだ。不景気な世情や高齢化社会は、市場において一概にデメリットではないのかもしれない。

4) 「食のみやこ 鳥取プラザ」

東京の新橋に鳥取のアンテナショップ「食のみやこ 鳥取プラザ」が8月29日にオープンし、賑わいを見せている。「東京にいなから鳥取を感じられる場所」をコンセプトに物産販売とレストランを兼ねそろえたショップだ。

1階の物産販売店舗では旬の農産物をはじめとする鳥取県の数々の逸品を販売している。鳥取は特産品が多く、地域や季節によってPRイベントが開き易い。観光地としても人気なので、観光もPRできる。また、2階にあるイタリアンレストランは、首都圏にある全国のアンテナショップ初の本格的なもので、鳥取県の豊かな食材を使った料理や地酒などを用意している。

アンテナショップはどこも似ていると思っていたが、本格レストランで直接特産品を味わえ、食材や地酒を気に入ればその場で購入できるとなると、鳥取に所縁もない人でもその地域をより身近に感じられるだろう。このようなショップをどこの地方も出せるとは言えないが、魅力を知ってもらい、町興しにつなげるためには首都圏などに住む消費者にこういったアプローチをすることも一つの手だ。